



特214  
435

現代生活叢書

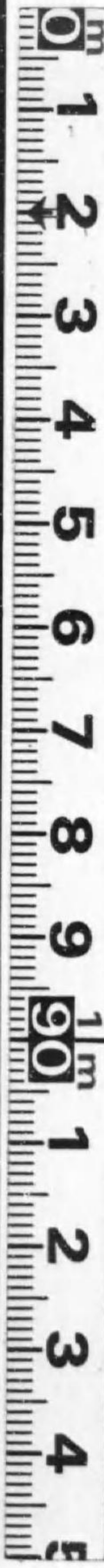
第五十輯

# 新時代の雄辯法

(編下)

法學博士

清瀨一郎著



# 始



帝國教育會出版部

特214  
435



現代生活叢書

第一期 第五十輯

# 新時代の雄辯法

下篇

法學博士 清瀨一郎 著



帝國教育會出版部



目次  
下篇

一七、眼は聴衆より離すな……………一  
一八、手はどう動くか……………六  
一九、足はどうする……………一五  
二〇、演説の組立を考へよ……………一八  
二一、資料の蒐集には平素より心懸けよ……………二五  
二三、手稿を携ふるは妨げなし……………二九  
二三、修辭と文法と論理……………三〇  
二四、結論——聴衆と雄辯……………四〇

新政治團體をおこせ!! (清瀬博士談)

- 1 既成政黨には政治的指導を缺く。時々政綱政策なるものを發表するが、是等は黨略の一部であつて一貫したる政治的信念を表現したものである。
- 2 政見の實行に冷淡にして、却つて政權獲得に熱中する。
- 3 政見に對する民衆の共鳴を求めずして、偏頗なる利益(地方利益)の提供を以て黨勢擴張の手段とする。
- 4 政黨間の鬭争は政見を中心として行はれずして、政權獲得の捷徑を争ふ事を中心とする。
- 5 黨員の去就は政治的信念に依らず現世的利益(地位の約束、地盤の都合、運動費の補助)に依る。
- 6 政黨には經濟的基礎並に會計制度なし。
- 7 信念なく、而かも現世利益に依りて去就する黨を纏むるに巨資を要す。
- 8 従つて財團政黨との結託を要す。

以上の組織上の缺陷は總て既成政黨に共通である。君子はその罪を惡んでその人を憎まずと云ふ。政黨必ずしも排す可らず。しかもこの缺陷、抜かざる可らず。既成政黨打破の眞諦は茲に在る。これ新政治團體の新に興隆するを祈る次第である。云々。

# 新時代の雄辯法 (下篇)

法學博士 清瀬一郎著

## 一七、眼は聽衆より離すな

偕て次は眼の動きであるが、昔から眼は口程にものを言ふとさへ曰はれて居るもので、従つて演説に於ても亦顔面の態度中では眼が最も重要な任務を有するものである。もちろん視力活用の要は決して演説にのみ重要性を持つてゐる譯ではない、如何なる場合に於ても、人の活動には眼が非常に大切なるものである。別けて演説に於ては眼の働きが甚だ大切な任務を有するもので、苟も演説を爲して聽衆に多大の感銘を與へんとするには、その演説中の思想や言語と相待つて視力も亦充分に活用せねばならぬ點が多々あるのである。就中各部

の態度中に於て最も大切なるは手の態度であるが、その手のゼスチャー應用の際には多くは常に其手と平行して働かねばならぬものは眼である。即ち手のゼスチャーがよく生きると否とは實に視力活用の如何によるものである。例へば今右手を前方に伸ばして、其の指示が左より右へと徐々に引き来るやうなゼスチャーを必要とする演説を爲す際に、辯士の眼が依然として前方のみを見つめてゐたのでは更に其のゼスチャーは何等の感興を惹くものでなからうと思ふ。即ち前述の如き場合には常に其の視線が指を離れずに働かねばならぬものである。斯かる點は後段手の態度を述ぶる場合に之を譲り、こゝには主として辯士の眼は如何様に働くべきものであるかを少し述べて見たいと思ふ。さて演説を進めて行く場合に、辯士の眼は成るべく聴衆を離れぬやうにすべきものである。尤も此のとは或は初めの間、即ち練習の未だ積まざるうちは聊か困難であるかも知れない、殊に最も初心の間は聴衆の顔を見るどころか、聴衆がまばゆくつて、人か、柱か、全然判らぬものである。故に私の所謂、眼を決して聴衆から離すなど云ふのも或る程度までは困難であるかも知れない。然し、さう云ふとは極めて短い間で、大抵の人が三四ヶ月練習すると先づ何處には誰れが居る位のこと

は判るやうになるものである。故に練習中と雖も、必ず眼は聴衆から離さぬやうにせねばならない。初めの一二回だけは夢中であるが夫れからは徐々に見えるやうになるものである。然し其のころから眼を全聴衆に注ぐことを習慣づけねばならない。今までの演説に於て辯士にも亦色々の癖があるやうだが、或る人の如きは最初から最後まで其の眼が常に中央のみを凝視して、再び視線が全聴衆に及ばないやうなものもある。もちろん斯かる人に限つて勝れた演説をなすものは寔に妙ないのである。諸君に於かれても是非將來はさうした眞似をなさざるやう注意して頂きたい。今若し斯かる行方をするときは、左右の座席に居る聴衆は實に物足らぬ感を懐くのみならず、必ずや全聴衆に向つて十分の感動を與ふことができるものではない。故に辯士の眼は常に左から右、右から左へと、絶えず視線を働かせて愈々此處ぞと思ふ個所を論ずる際には一人一人の眼底にまで自己の視線を射込む位に視力を活用せねばならぬものである。要するに演説は、之を日本式に曰へば恰も一つの膝詰め談判の如きもので、飽くまで自己の主張を是なりと信じ、他を説服するところに、其の使命と目的があるものである。彼の個人の談判に於ても談判上手の人は、話が進んで愈々急所の個處に至ると

きは必ず相手方の眼を凝視するものである。而してさうなると言語の交渉は既に第二となつて、全く視力と視力の闘ひに移るものである。其の場合視力應用の巧みなるものが大抵勝ちを制するものである。斯くの如く個人の交渉に於ても眼の利用は甚だ大切なるものである。況んや眞劍勝負にも等しい演説に於てをやである。故に私はこゝに諄々しい説明を爲すよりも寧ろ諸君に於て命の取りやりでもする程の眞劍な談判をなすときは諸君の眼が果して如何に緊張するものであるかを想像して、眼の活用を會得して貰ひたいものである。要するに演説中に於ける辯士の眼は寸分の際を許さぬものである。即ち寸分のすきまなく活用せねばならぬものである。此の點は全く擊劍と同じであらうと思ふ。而して斯の如くするときには聴衆の眼も、亦必ず一齊に辯士に向つて集注して来るものである。さう斯うなると演説は洵に行りよいもので今、さうなるときは例へ聴衆が百人るやうと、千人居らうと聴衆と辯士との關係は全く個人との交渉談判の如きものに變化して来て、更に百人千人の衆を相手にしてゐると云ふやうな考へがなくなると同時に、聴衆も亦辯士の説くがまゝ、命ずるがまゝに、其心理が動いて来るやうである。今、さうなつて来た時には辯士が若し手を前に伸ばして、左か

ら右へと動かせば、聴衆の眼も亦その手の動くまゝに動いて来るに相違ない。是等はけだし彼の催眠術者の用ひる暗示とよく似てゐるやうに思ふのである。催眠術に於ても術者の最も大切なるものは矢張り眼の應用のやうである。彼の催眠術の如き其の熟達したるものになると飛んで居る鳥、走つてゐる犬にまでも施術をして、よく鳥も落せば又犬も倒すのであるが、其の場合に於ける術者の眼は實に一種の凄味を有するものである。尤も催眠術が前述の如き域にまで達するには素より人知れぬ修練と工夫を要するのは勿論であらうが、然し愈々施術するときには矢はり眼の力が大切のやうである。斯うなると人の眼光も亦寔に不可思議の靈能作用があるものゝやうである。故に演説の如く聴衆の心理を動かし而して之を捉へ、之を征服せねばならぬものである以上は、素より十分に働かせることは洵に當然のことであらうと思ふ。尙ほ最後に注意して置きたいのは、辯士が登壇中に於て眼を活用することは、只聴衆に向つてのみではなく時々自己の態度に關しても亦注意することが肝要である。即ち今、自分の手、自分の足は如何に動いてゐるか云ふことに對して、よく之を見ることである。多くの辯士の中には之を忘れてゐるものがあるから、演壇に於ても往々妙な癖を行つて

更に平氣でゐるものがある。大抵は自分でも氣が附かないのであらうと思ふが、さう云ふ場合には寧ろ聴衆の方が常に氣がついて、中には苦笑しつゝ、聽いてゐるやうであるが、斯くの如きは皆演説に於ける眼の活用を知らざる所から生ずるの結果で、寔に見苦しいことである。諸君に於ては將來決して斯かることのないやうに希望する。

### 一八、手はどう動くか

偕て次は手と足のゼスチュアールに就いて述べて見ようと思ふ。普通に演説の態度と言へば大抵の人が手の動かし方にのみ注意するやうであるが、それ程又演説には手の動作が大切なものである。啞者の如きはそれである、又啞者ならずとも言語を異にするものなどが談話を爲す際に其の補助を爲すべきものは必ず手である。彼の手真似にても亦十分に話ができることは既に諸君も承知のことであらうと思ふ。斯くの如く手は其の利用の如何に依つては寔に言語の代用を爲し得るものであるから、若し巧みに之を應用せんか演説をして著しく精彩を放たしむることは今更多言の必要はなからうと思ふ。故に世人一般が演説の巧拙は、只手の

運用如何に依るが如くに思ふのも亦當然である。然し手の運用は一見甚だ簡單なるやうであるが、實は之を正確に利用せんとするには餘程練習をなしたる後でないとな往々にして誤りを生ずるの虞れがある。即ち手のゼスチュアールは他の態度と違つて、其の一指一掌の動き方にも、亦夫れ々の意味があり型があるもので、只徒らに動けば良いと云ふものではない。これ私が手のゼスチュアールは他の態度よりも餘程練習せねばならぬと云ふ所以である。従つて今これを精細に述べんとするには可なり時間を要するのみならず、餘り微に入り細に亘つて詳述することは、或は却つて折角演説の練習に志すものゝ勇氣を削減することにならな

いと限らないから、其の微細なる運用は之を他日に譲り、こゝには普通一般の演説に於て利用すべきものを述べて、諸君の参考に供したいと思ふ。偕て本項の説明を容易ならしむるため、先づ大體を左の如くに區分して述ぶることとする。

第一、手が正面(前方)直角に伸びるとき。

第二、手が側面(横)直角に伸びるとき。

第三、手が後方へ四十五度位に伸びたるとき。

第四、手を高く上方に擧ぐるとき。

第五、手が正面と側面の中間(四十五度)位に伸びたるとき。

而して第一の態度が又左の數種となるのである。

(イ)掌が上を向くとき(ロ)掌が下を向くとき(ハ)掌が前面を向くとき(ニ)全然掌を握るとき(ホ)示指を残して他の四指を握るとき等々の數種。

即ち、

斯くの如く、手の態度は寔に複雑してゐるため、之を實際に行はんとするには常に細心の注意を拂つて練習せねばならぬ。偕て是から順を逐うて、其の各場合を説明して見ようと思ふのであるが、私は諸君の理解に便するため、成るべく贅文贅字を省いて簡單に之を述ぶることにする。

先づ第一の態度である。手が前面に伸びた場合は、大抵直接個人に關係を有すること、殊に其の手が前面のみにて運動が終始するときは全く聴衆個人々々の問題か、或は聴衆個人々々に向つて何事かを訴ふる場合に用ゆる態度である。即ち「本問題程直接諸君に關係を有する

ものは恐らく他になからうと私は信じます」と言ふやうな場合には、自然辯士の手が徐々と前方に伸びて行くものである。そこで、又前方に伸びたる手が若し左から右、或は右から左へと運動するやうなときは、土地の遠近、もの比較、人の往來等にさうした態度を用ゆるのである。例へば、大阪と東京の比較又は、飛行機が大阪を出發して東京に着いたと云ふやうな場合である、而してさういふときには掌は大抵縦に活用されるやうである。次は前方に伸びた掌が若し上を向いたときは、もの、開く形ち、受け入れる形ちであるから、此の場合には聴衆に懇願をなす時などに用ゆる態度である。例へば是非諸君の清き一票をと云ふ時等には斯うした型を用ゆるのである。又人を案内する時なども亦この態度を用ふべきものである。

(ロ)の場合、即ち掌が下を向いたときは如何なる意味を有するかと曰はゞ、之は上から下に向つて押す形ちであるから、命令、抑壓等を意味し、又もの、高下等を論ずるときなれば多くは低きものを示す態度となるのであるが、又或る場合にはものを愛するとき等にも用ゆるのである。(ハ)の場合、掌が前面に向つて押し出されたときは如何なる意味かと云ふと、それは常識にても判断し得らるゝが如く物を外に押し出す形ちであるから排斥、拒絶等を意味



するものである。例へば「斯かる事は断じて吾人は排斥せねばなりません」と云ふやうなときに用ゆる態度である。(二)の場合、指を握りしめて拳骨を作るとき、之は多くの辯士が常に用ゆる態度であるが、これは決心、決意、覺悟を表示するゼスチュアーである。即ち「今や既に議論の時代ではありませぬ、吾人の探るべき道は、只實行の二字あるのみである」と云ふやうな場合に用ひらるゝ態度である。故に此の態度は單なる理論や事實を述ぶる際には決して使用すべき型ではなく、愈々辯士の決心を示すときの外は餘り用ひぬ方がよいと思ふ。次は(ホ)示指一本を伸ばし、亦之を上下に動かす場合であるが、此れも亦多く用ひらるるゼスチュアーで、而してこれは聴衆に何か注意を與へ、又は個々の事物に就いて説明をするか、個人の批評等をなす場合には凡てこの態度を使用するものである。如上各種の態様は、何れも右手又は左手が前面に向つて伸ばされたる時に於ける手のゼスチュアーであるが、斯くの如く其の態様の如何に依つて各々意味を異にする所以のものも畢竟するところは、皆自然の法に則つとり、自然の形ちに適うたに過ぎないと思ふ。即ち前述の手の平を聴衆の方に向けて押し出す態度が排斥、拒絶を意味し、手の平を上に向けて、之を少しく舉げ氣味にす

るのが、物を受け入れる態度である、と云ふが如き、一として自然の形ちでなからうか。故に大抵のゼスチュアーは誰れでも、自己の常識に訴へて自由に工夫し得らるゝものであらうと思ふ。要は大自然の法則に適ふことと、陰陽二元の應用を巧みに利用するにあるのみである。以下説明せんとする各種の態度も亦皆それに外ならないのである。偕て第二の態度、手が側面九十度の角度、即ち肩と水平に伸びた場合は如何なる意味があり、如何なる時に此のゼスチュアーを使用するものであるかと云ふと、此の場合は大抵學理的、論理的の説明をなす際に用ゆる態度であつて、この態度も亦手の先きが上るときと、下るときとがある。而して上るときは、論理が段々進んで、高遠なる理想に到達するか、或は又何か特種の理想境を想像する際等には、徐々に其の手先きが上つて來ねばならぬものである。斯かる際、決して漫りに拳骨などを振り廻はしては、洵に見悪い態度となるから宜しく注意せねばならぬと思ふ。全體演説の態度は云ふまでもなく、體操や運動でないのだから只徒らに手を振り足を踏めばそれでよいと言ふものではない。然るに今までの演説には往々にして彼の辯士が、拳骨を振り廻はして暴れる人が多いやうに見えるのは洵に遺憾のことである。殊に此の側面に手

を伸したときに多いやうである。實に側面に手を出す場合で拳骨を用ゆることは、演説の態度としては極めて妙なもので、大抵は掌を下に向けるか、之を斜に用ゆることが多いのである。而して掌が水平線下に向つて動いて來るときは、今まで辯士の述べて來た學理的智識的の説明に對して、自己の斷案又は意見を發表するときには使用するゼスチュアールである。要するにかくの如き態度も亦社會秩序の通念から當然の動作であらうと思ふ。即ち掌の上るときは、高き理想を表示し、下るときは自己の意見の發表を意味するので、單に理論などを説明する場合は掌を水平に置くのは、寔に自然の形ちであらうと思ふ。然らば第三のゼスチュアールである。手の後方に廻つた時は如何なる意味を現はすかと云へば、これ亦誰にも理解し得らるゝ如く、之は過去のことを言ひ現はす際に用ゆる態度で、例へば歴史上の事實、或は又自己の追懷談などを叙べるときに、多くかうしたゼスチュアールとなるものである。次は第四の態度である。手を高く頭上位にまで擧げるときは如何なる意味を有するか、之も今までの説明で大抵理解し得らるゝと思ふ。即ち誰れでも常に行る態度である。彼の萬歳を唱ふるときが多くは此の態度であらうと思ふ。手を組み、手を下けてゐては、萬歳を唱ふる態度と

副はないやうである。もちろん萬歳は如何なる場合に之を唱へ、如何なる心理で之を唱ふるものか、更めて説明を要するまでもないと思ふ。即ち凡て人に敬虔の至情が極致に達するとき、或は至大至高の理想に融合せんとするの情が燃えて已まざる場合等には自然其の手は高く擧がるもので、例へば、天を仰いで吾人の至誠を訴ふるときなどには、かうした態度に出づるものである。彼の擧手の禮の如きも亦さうした心の現はれでなからうか。故に此の態度は人の感情が最上最高の極致に達したときの自然の表現である。従つて演説中に若し左右の両手が高く天上に達するが如き場合は愈々其の情の高きを現はすものである。最もかゝる態度は一演説中濫りに使用すべき態度でないと思ふ。愈々こゝぞと思ふ際に用ひて、初めて聴衆に大なる感銘を與ふことが出来るものである。第五の態度としては、手を前面と側面の中間即ち四十五度位の位置に伸ばしたときは、如何なることを述ぶるものであるかと云ふと、これは比較的聴衆と縁遠きことを述ぶる態度で、多くは演説中の附帶事項を述べる態度である。彼の引例比喻等の如き附録的事項を述べる際、又は歴史上の事實などを述べる場合には此のゼスチュアールを用ゆるのである。

以上は手の態度に關して極めて大要を述べたに過ぎないが、諸君は先づ其の大要を十分に練習して、それが自由に運用せられるやうになつたなら、自ら進んで微細なる點まで研究の歩を進めるのが宜いと思ふ。素より態度は自然であり、必要でなければならぬものであるから、よく其の原理を會得すれば誰れでも自由に運用し得らるゝものである。然し我國の演説家は往々此の態度を輕視して、一口に枝葉の技に過ぎないと貶して終ふやうだが、斷じてかかる謬見に迷はず飽くまでその妙諦の技を發揮されたいのである。殊に手のゼスチュアー程言語に精彩を與ふるものはないので、彼の羅馬の大雄辯家クロツセリアスの如きは「手なくして天下に雄辯なし」とまで喝破されてゐるので、實に雄辯には手の運用が尊重せられてゐるものである。こゝに一言附加して置くことは手の動くと共に眼は必ず手の動作に伴つて活用せねばならぬものである。手が前に出れば眼も亦前に動き、手が高く上に掲げらるれば、眼も亦従つて上を仰ぐものである。本節を終るに臨みなほ一言すべきは手の動かし方が餘りに大きく、餘りに頻繁では却つて滑稽に見ゆる場合がある。前にも述べたやうに總て自然の流露でなければならぬ。又演説の内容をよく照應しなければならぬ。

## 一九、足はどうする

次に態度の内、尙ほ未だ残つてゐるのは足の問題である。足は他のゼスチュアーに比較して研究すべき點が甚だ少ないのである。然し足は全身を支へるためには寔に重要な任務があるもので、従つて足の位置如何は、人の姿勢を保つ上に大なる關係を有するものである。即ち足の態度に依つては姿勢が正しくもなり、不恰好にもなるものである。殊に足の位置如何は全身に力を込める場合には著しく影響を有するものである。今、然らば演説の態度として足は如何にすべきものであるか、私は先づ左の要件から見て其の位置を定むべきであらうと思ふ。一、比較的正しい姿勢を保ち得ること、二、永い間起つても比較的疲勞を感じざること、三、全身に力の入り易いやうにすること、即ちこの三つの要件を具へ得るのでなければ演説の態度としては不向きであらうと思ふ。そこで普通に人の立つて得らるゝ足の模様には如何なる種類があるかを見ると、夫れは極めて簡單である。けだし左の以外にはなからうと思ふ。(イ)兩足を左右に廣げて立つ場合。(ロ)兩足を前後に廣げて立つ場合。(ハ)兩足

を正しく揃へて立つ場合。(ニ)片足を直立して片足を少し斜にしてゐること、先づかくの如き位であらうと思ふ。而してその内(イ)(ロ)の如き體操のときならば別問題であるが、普通に人の起つて居る恰好ではなからうと思ふ。故に(ニ)と(ハ)を選ばねばならない。(ニ)は氣を付けの姿勢であるから、正しい姿勢には相違ないが、永く起つてゐる場合には聊か不向きである。又この姿勢では全身に力が容れ難いから聲音に力を要する演説の態度としては之を避けねばならない。そこで私は足の態度は最後の(ハ)を探るの外はないのである。これは誰も知つてゐる、即ち「休め」の姿勢で、立つてゐるには最も樂なゼスチユアで且つ腰から下は勿論、上全身にも亦充分に力を入れることが出来る態度である。而して若しも足の疲れたときは交互に取り換へれば宜いのである。私は前に手の動作は之を成るべく大きく動かすのが宜いと云うたが、足は之に反して成るべく軽く、細かに、動かすのが宜いやうと思ふ。餘り力を入れて大きく動かすと寔に見にくい態度となるものであるから、此點は特に注意して貰ひたい。態度に就いては尙ほ此の外に述べて見たいと思ふこともあるが、普通演説を爲すに就いての概要は、先づ如上の説明にて充分であらうと思ふ。實は態度に關しては講演者

が、その都度引例する態度の型を直接に見ながら聽講せらるゝと餘程理解を助くるものであるが、説明を読むだけでは或は時に隔靴搔痒の感がないとは限らない。故に若し諸君にして態度の練習をなすときには、誰れか相手を求めて共に練習を爲すのが良いと思ふ。鏡に向つて練習をすると云ふ人もあるが、然しそれは可なり大きな鏡でないと恐らく全身の態度を見ることは出来ないだらうと思ふ。今や全國至る所に於て雄辯の研究が盛んであるから、一二名の同志を索めることは、まだ難事でないと思ふ。故に此の點は切に諸君に勧める所である。更めて云ふまでもなくすべて態度は理論の問題ではなく事實の問題である。學問と云ふよりは寧ろ技術の一種である。而して此の技術の巧拙如何が、言語の補助、思想の理論が著しき影響を有するものである。即ち言語のみでは以て未だ十分に其の意を盡すことの出来ない場合、殊に人の感情を湧起せしむるときに於ては飽くまでも態度、即ち表情の用に待たねばならないと思ふ。殊に複雑せる思想を分解し、或は事物の指示をなす際には之を助け、之を明かならしむるものは主として態度應用の如何によるものである。要するに雄辯の極致は感情の迸發であるから、辯士の感情を如實に現はすことが出来なければ決して雄

辯の域には達せられまいと思ふ。是れ雄辯術には指示態度が、表情、等を特に尊ぶ所以である。此の外講談、落語家等の常に用ゆる幻想態度なるものもあるが、之は演説の方では餘り用ゆることが少いやうであるからこゝに述ぶる必要はないと思ふ。以上を以て態度に關する説明は之を終はることにする。

## 二〇、演説の組立を考へよ

演説を爲すに就て形式的要件又は外面的要素とも稱すべき、言語、聲音、態度等に關しては極めて大要ではあるが先づ大體は之を述べた積りである。然し演説は前にも述べた通り思想を中心とすべきものであるから、如何に聲音、態度等の形式が立派であつても若しその内容となるべき思想、資料等が貧弱であつては斷じて雄辯と稱することはできない。即ち雄辯の完璧を期せんとするには、もちろん形式と共に其の内容が整はねばならぬものである。否、寧ろ内容の充實をはかることは實に雄辯の第一義であると私は斷言するのである。而して其の内容の充實をはからんとするには努めて資料の蒐集と、之が組立に苦辛せねばなるまいと

思ふ。依つて是から組立と資料に對して少しく卑見を述べて見たいと思ふのである。組立と資料、此の二つの者は最も密接の關係を有するもので、即ち一つの演説を組立てんとするには、先づ思想の統一と之が整理を爲し、次で其の思想、その主張をより強からしめ、より理解し易からしむるために、資料の選擇をなすべき筈のものであるから、組立と資料の蒐集は寔に離るべからざるものがある。寧ろ立案の順序より曰ふならば第一思想、第二資料、其の次に初めて組立に着手すべきものであらうと思ふ。然し初めて演説の草稿を組立てんとするには、先づ組立の方法を前に知つてゐる方が便宜であらうと思ふ。是れ即ち私が先づ組立より論ぜんとする所以である。

演説の組立にも亦文章の組立と同じやうに色々の方法がある。即ち文章の組立に三段法、五段法、八段法とあるが如く、演説にも亦三段法、五段法、八段法等に依つて組立てられる。今文章に三段法と云ふのは、前文、本文、末文等を云ふので、例へば、常の書翰文なれば、「拜啓」「益々御清適の由」「御免下さい」等の起筆が前文で、「扱て何々の件につき」「就而今回云々」等の用向きが本文である。末文と云ふのは「先は右御案内迄申上候」「餘は後便に讓

り申候」等の結辭である。演説の三段法又は三席の構成と稱するのは、序説、議論の本体、終結等を云ふのである。彼の佛教の經文などでも亦序分、正宗分、流通分等の三段で多く組立られてゐるやうである。斯くの如く文章と演説の組立とは寔に共通の點がある。勿論兩者とも其の本來の性質に於て著しき差異のあるべき筈はない。只、文章は文字を利用し、演説は言語を其のまゝ、利用すべきものである點に於て、兩者の形式は甚だ異つてゐる。併しながら、若し演説其のものも筆記するときは、演説は變じて一つの文章として見られるものでなければならぬ。そこで演説としては聽けるが、文章としては更に見られないと云ふのでは決して名演説と稱することはできないだらうと思ふ。然し名文章は必ずしも、其のまゝ、名演説の草稿とならぬ場合がある。それは主として耳に依つて聽くべき演説と、單に眼に依つて見る文章とは、自ら修辭の用法にも亦異なる點があるからである。即ち文章は之を讀むものにして若し難解の場合があれば理解し得るまで充分に考慮するの時間もあるが、演説は之に反して更に其の餘裕のないものである。斯かる點が、文章を作る場合と、演説の組立とに生ずる相違であらうと思ふ。従つて單に文章を作る場合と演説の草稿を作る時とは餘程言句の配列等

に留意せねばならぬところである。然しそれ等の點は多く文法上修辭上の問題であつて、根本の組立問題ではなからうと思ふ。故に私は或る程度まで演説の組立にも、亦文章の組立法を用ひて差支なからうと思ふのである。然らば演説の組立には、如何なる方法を用ゆるか、此の點は前にも云ふ通り色々の説もあり、議論もあるが、普通一般に用ひらるる組立は五段組立法に依るやうである。即ち五段の組立と云ふのは第一に序説、第二に事實、第三に理論、第四に附帶事項、第五に結論といふ順序に組立つて行くのである。尤も聽衆の程度、會場の空氣、地方的環境等に依つては理論的の事項を前にして、事實の問題を後にすることもあらうと思ふ。要するに演説は一個の問題を捉へたならば宜しく之を事實の上より、理論の上から、縦横自在に論辯して、其の演説を爲すに至つた趣旨目的の貫徹を期せねばならぬことは當然である。而してそれを爲す間に自己の思想、自己の信念を遺憾なく理解せしめ、遺憾なく流露せしめねばならぬものである。然し其の際最も留意することは聽衆に倦怠の念を生ぜしめぬことが大切である。斯かる點も亦文章と聊か趣きを異にする點であらうと思ふ。何となれば文章は之を讀むものにして、若し倦怠の念が生ずれば必ずやそれを捨て、

他に移ることも自由である。けれども演説にはそれが出来ない、故に演説は見やうによつては餘程文章の組立より困難であるとも言ひ得るのである。即ち附帶事項に用ゆる資料の蒐集配列等の苦辛がそれである。偕て如何なる組立法に従うても最初には必ず序説を用ゆるものである。文章なれば落筆の初一句であつて、即ち演説の全體殊に本論に對しては實に端緒の言句を爲すべきもので寔に大切なるものである。故に此の初一句の如何に依つて、よく聴衆の信任と聴衆の心理を捉へることが出来るものである。此の點は演説も文章も亦恐らく同じであらうと思ふ、従つて彼の文章家などが古來より此の起筆を貴ぶのも亦斯かる點からであらうと思ふ。彼の文章家が多年の苦心に依つて考案せられたる起法八則の如きも亦實に落筆の一句に重きを置いた所以である。某先輩の如きは演説の劈頭語にも亦此の起法八則を適用するを以て可なりと説いてゐるやうだが、未だ演説練習中のものには或は其の全部を巧みに應用することは少し難かし過ぎる感がある。故に今其の中にて多く一般に利用されつゝある二三の點を述べて参考に供したいと思ふ。(頌聖法) これは古來よりの聖徳ある君子人を頌して開口の序言とするので、多くは其の人の言行の一端を引用して、自己の曰はんとする所に權

威あらしめんとする行り方である。(叙事法) 劈頭から事實を叙し問題を附加して説き初めるのである。叙情法これは開口直ちに胸中の情を表現する行り方で、此の法は多く、大會の如き場合の演説にて、短刀直入に鬱勃として禁ずる能はざる真情を、先づ聴衆に訴ふるもので、例へば今や吾々をして、實に黙視するに忍びざるものがありますと云ふが如き行り方である。其他詳述すれば寔に参考になる點もあらうと思ふが、普通一般演説の序説としては、矢張り彼の日用文の前文の如く、單なる挨拶的言句から説き起して、逐次本論に進んで行くのが平凡のやうではあるが、事理の説明を期する上に於て、寔に妥當のやうである。偕て序説の次には事實又は理論を陳ぶるのであるが、其の事實と云ふのは、云ふまでもなく演説をなすに至つた遠因近因の事實である。もちろん登壇するに至つた動機を含むことは當然である。而してこゝに理論と言ふのは、如上の事實に關聯する自己の思想又は、一般の學說等に従つて飽くまで自己の所論に權威あらしむると共に、他面又聴衆の理性に訴へて、心の底から辯士の主張に服せしめ理解せしめねばならぬ。然し此の際誰れでも往々にして陥り易いのは難解の理論を平易に説明し能はざることである。このことは前にも述べたと思ふから

省略をするが、餘程注意をせぬと折角の名論も只聴衆に倦怠の念を生ぜしめる原因となる。かるが故に附帶事項として、比喩引例、或は奇想天外の諧謔などを用ひて聴衆の理解を補ひ、そして起り易き倦怠を防ぐことが大切である。要するに演説の組立は大體以上の如きものであるが、こゝに少しく注意すべきことは、理論的の説明をなす場合には必ず論理學の法則に従はねばならぬことである。もちろん理論の應用は演説全體が論理の法則に従ふべきもので序論より結論に至るまで、すべて論理的一貫を期せねばならぬ筈のものである。論理の大意は後章更めて論ずることにする、斯くの如く演説の組立は論理の法則に従ふべきものであると同時に又智情意の三體を備へねばならぬことも大切である、智とは人の理性であり、情は人の感情であり、意は人の決行力である。即ち、演説は智に訴へ、情に訴へ、而して最後に聴衆の決心を促すものでなければ如何なる名論卓説も雄辯と稱することは出来ないものである。此の點が、彼の學校其の他に於てなす講義講演等とは甚だ異なる所以である。故に苟も一個の問題を捉へて演説の組立をなさんとするものは宜しく如何にせば良く人を動かす得るか、人を心服せしめらるゝかを考へて、充分に資料を蒐集することに努めねばならぬ、

故に大體組立が出来たならば、先づ之を自己に問ひ自己に聽いて、これならば必ず人を動かすに足ると確信のついた後、初めて登壇すべきものである。

## 二一、資料の蒐集には平素より心懸けよ

こゝに資料と稱するは、演説の組立をなすに必要な材料を云ふのである。演説の組立に多くの資料を要することは恰も家屋の建築に多く材料を要すると同じやうなものである。而して家屋の組立には彼の工匠等が先づ一通りの材料を前に集めて置き、それから設計の案に基いて、土臺、柱、棟の如き骨子の材料を以て、荒組みをなし、逐次進んで壁、造作、疊、建具等の裝飾に移つて行くものである。演説の組立も亦かくの如く先づ其の初めに當つて充分に資料の蒐集と之が選擇に努力せねばならぬものである。そこで其の資料に依つて、一定の方針の下に粗より細に入り、雑より微に入つて宜く取舍案配して、初めて一つの演説が取立てられるものである。故に演説の組立には寔に資料の採擇が大切で、従つて演説内容の良否は一にかかつて資料採擇の巧拙に因るものである。そこで問題になるのが資料の問屋であ



る。これは家屋建築の場合と異つて、彼の石屋、材木屋の如き問屋はないのである。歐米には資料索引に便する相當浩瀚なる書物もあるさうだが、我國には未だ適當なるものを見ないである。故に己むを得ないから、平素に於て自ら之を蒐集して置くの外はなからうと思ふ。もちろん平素少しく注意さへすれば相當資料の貯蓄は出来ることと思ふ。即ち一冊の書物、一枚の新聞紙にも若し注意して之を讀むならば必ず演説の資料とすべきものは可なりあるやうに思ふ。故に其の都度心附いた點はそれをノートに書き、或は切り抜いて他日の用に備へて置くのが良からうと思ふ。即ち新聞紙に依つて毎日報導さるゝ、政治上經濟上社會上の事件は勿論、其他和歌、俳句、金言、一口噺等の類に至るまで、演説の資料になりさうなものも悉く貯蓄して置くのがよい。殊に適當なる統計の如きは最も必要である。斯くの如くにして數年心掛けるときは大抵自分で資料の問屋になれるものである。尤も特種の演説でもなす際には其の問題に就て特に研究せねばならぬことのあるのは當然である。要するに資料の蒐集は日々の新聞を始め其他各種の書物を良く注意して讀むことである。如何なる書籍と雖も其の内には相當資料とするに足るべきものがある。尤も演説の種類に依つては或る程度

まで書物を限定して研究することもよからうと思ふ。例へば政治の演説を爲さんとするものなれば先づ政治學、憲政史、社會學、外交史、經濟學等の書籍は必ず讀まねばならぬもので、次に哲學、國家學、社會政策、歴史、傳記、經書、金言集、統計書等のものも亦參考として常に研究して居らねばなるまいと思ふ。殊に最近言論界の傾向に副はんとするには社會科學の研究が最も必要であらうと思ふ。即ち如上の研究に依つて、一面には、先づ自己の思想と信念を固め、他面それ等の書物より多くの資料を拔萃して置くやうにすれば、何日如何なる問題に遭逢しても必ずや相當の演説が組立て得らるゝものである。併し斯くいふと演説の組立は如何にも難かしいものゝやうに思ふ人がないとも限らないが、けれども苟も一個の政論を述べんとする程のものは斯かる研究くらゐを爲して居らねば到底眞面目なる演説の出来るものではない。又斯うして研究するにあらざれば決して自己獨特の清新なる資料に依つて聽衆に感銘を與ふることは出来ない。往々ある例だが、不徳の辯士になると他の辯士の苦辛して蒐集したる資料を全部其のまゝ盗用して憶面もなくさも自己の思想の如くに演説を組立てるものがある。斯かることは演説道徳上斷じて許すべきことではなからうと思ふ。即ち

演説の資料は飽くまで自己の力に依つて集めねばならぬものである。文章に剽窃を惡むが如く、演説にも亦他の辯士の資料を、其のまゝ使用することは堅く慎まねばならぬことである。もちろん演説の趣旨が、全然異なる場合に於て、其の中に用ゆる資料が一般的に知られてゐるもの、例へば古人の金言、和歌、俳句、其他統計上の數字等を使用することは自由である。要は同一趣旨の演説をなす際に他の辯士が常に用ゆる引例、學説、諧謔等を其のまゝ用ゆることを禁ずるのである。然し思想の共鳴は絶対に自由であらうと思ふ。従つて釋迦の思想に共鳴しやうと、キリスト、孔子、老子の思想に共鳴しやうとそれは自由である。降つて新らしいところでは、尾崎、濱口、床次の諸先輩、永井、中野、田川等定評ある雄辯家を始め湯淺、鶴見氏等の新自由主義等に共鳴して、その要旨の一端を資料に用ゆることは更に差支ないことと信するのである。

こゝに挿話の事を一言する。前にも屢々述べたる如く、聽衆の倦怠を中斷し、又は事物の引例の爲め演説の中途に一聯の物語等を挿入する事は必要である。しかし、これには又弊害も伴ふものである。それがため演説の氣勢を殺ぐ事もある。又あまりくどくなる事もある。

故に之を濫用してはならぬ。一演説に一回以上は不可と断定してよからう。古歌とか、漢詩の一、二句位、又格言、俚諺の如きものは演説の氣勢を殺ぐ事も少い。これは一演説二三回位までは毫も氣勢を殺ぐ憂なく、又聽衆は印象深い名句を記憶し、演説の効果を永續的ならしむる效がある。

### 二二二、手稿を携ふるは妨げなし

前二節に述べた如く、演説を一定の方針の下に組立て、又之に相當の資料を盛るときはここに演説内容は完成する。仍て愈々登壇する場合には組立の骨子、必要な資料を紙片に書き抜いて壇上に持つて行くことは妨げない。これは原稿ではない手稿である。世間では手稿を持つて壇上に上るのを恥づべき事のやうに考へて居る人もあるが、それは謬見である。必要な年代數字其の他の資料は書き止めた方が正確である。外國では近時手稿も有たない様な演説は、無責任なるものとして一般に歓迎せられぬさうである。但此手稿は特に記憶を補ふに止めなければならぬ。又演説中始終之を見つめるのも不體裁である。手稿は萬一の用意

と心得るがよい。それ故あまり詳しい手稿を作つてはいけない。手稿を詳しくすれば原稿となる。原稿の朗讀は演説ではない。朗讀では演説の目的たる聴衆説服といふ事は絶対に不可能である。

### 二三、修辭と文法と論理

我國に於ては演説と修辭との關係が、之を文章と修辭との關係に比較すると幾分の相違があるやうである。然し元來修辭なる語、即ち「レトリック」と云ふ語はもと「話す」「話し手」といふ意味から轉じたもので、遠く二千年前の昔に於ては、現在の修辭學なるものも亦けだし雄辯學の一種として研究せられたるものであらうと信ずる。もちろん修辭學は世界に於て最も早くから雄辯學の進歩したギリシヤに其の源を發して、漸次歐米の諸國に於て發達したるものである。而して歐米諸國は我國の如く文と言との間には、さう著しき相違もなく、言ば即ち文であり、文即ち言である。只之を文學に依つて記すると、口に依つて言ふに過ぎないのである。然るに我國に於ては言必ずしも文ではない。即ち文章と言語とは全く別もの

のやうになつてゐる。尤も我國の事物が往昔其の範を支那に探つた關係から自然斯くの如き傾向を生ずるに至つたのであらうと思ふ。由來支那と云ふ國は古より修飾虚禮を尙ぶ國柄として知られてゐる。従つて文章の如きも亦徒らに修飾を好み、文字の配列等には全然無益の勞を費して、而もそれを誇らんとするの傾向が今尙ほあるやうである。故に彼の國の人達は古來より言葉の國と云ふよりは寧ろ文字の國、文章の國として、寧ろ、自ら世界にそれを誇つてゐるかも知れない。彼の蘇秦、張儀の如き偶々ギリシヤのデモセネスなどと時代を同うして輩出したる一代の雄辯家ではあるが、然し其の雄辯なるものも決してギリシヤ、ローマ等に於て發達したる大衆的雄辯にあらざることには前に述べた通りである。而して我國も亦古より「言擧げせぬ國」などと稱して甚だしく言論を卑んで、文章を尙び、而も其の文章が前述の如き支那流の修飾に囚はれてゐるのは洵に遺憾である。斯かる點が自然我國に於ても亦言と文との間に著しき相違を生ずるに至つた所以であらう。故に私は常に此の點に關して、一日も速かに歐米諸國の如く、言と文とを一致せしむるやうに致したいと思ふ。就中、民衆一般に知らしめんとする諸法令の如きは直ちに之が改作をなすべき必要があると思ふ。

のである。今其の一例を示せば警察犯處罰令の第三條第二項にある、「公衆ノ目ニ觸ルヘキ場所ニ於テ、袒裼、裸程シ又ハ髻部、股部ヲ露ハシ、云々」第九項の「炮灸、洗滌、剝皮ヲ要セス云々」の如き法條であるが、斯かる難かしい法文の意味は、全國民中最も多數を占めてゐる、即ち小學校卒業程度のものには恐らく理解することは出来ないだらうと思ふ。然し法を知らざるの故を以て其の罪を免がれることが出来ないのは法の原則である。實に氣の毒と云ふよりは寧ろ滑稽の沙汰ではあるまいか。其の他彼の政黨の大會に於て讀む宣言文の如き亦ことさらに苦辛して難かしい漢語など並べて喜んでゐるやうに見える。文は決して飾りものに之を作るにあらずして、誰れでも其の意義が宜く判るやうに作るべきものであらうと思ふ。すべて修辭學の教へんとするところは、先づ第一に文章を作るものをして、その文章が誰れでも一讀すれば直ちに其の意味を誤りなく解り得るやうに、普通一般の國語を以て、作ること即ち言句の聯絡、統一等の研究をなすのが主たる目的とされてゐる。故に將來我國に於ける文章が全然舊き習慣を脱して、歐米の如く凡ての階級に於ても言文一致が行はれるやうになれば、修辭學なるものは單に文章學たるに止まらずして、其の多くの部分が雄辯學と

共通するに至るであらうと思ふ。併しながら現在我國に於ける修辭學なるものは、主として文章を作るもの、爲めに言句の研究をなすものであつて、雄辯修辭の研究は未だ尙ほ閑却されてゐるの傾きがある。即ち今の修辭學なるものは寧ろ一個の文章學と稱するのが穩當ではあるまいかと思ふ。尤も我國に於ける修辭なる語は、其の源を易經の中にある、文言篇、即ち孔子が乾坤の徳を頌せる辭として、「忠信所ニ以進ニ徳也。」修辭立ニ其誠ニ所ニ以居ニ業也」と云ふところから出てゐるのださうだが、抑も其の意味と雖も、廣く一般の言句を修むることを言つたのではなく、易、象爻の諸辭を修めて、誠を以て之に隨ひ、之を行ふことをいうたのであらうと思ふ。勿論本章に於ては斯かる技葉末節を穿鑿するのが目的ではない。要は演説をなすに當つて、辯士の使用する言句は、如何にすべきものであるかの研究をすればよいのである。

諸て演説は文章と異つて、主として言語の利用に依つて、思想を聽衆に傳達すべきものである。従つて演説に用ゆる言句は、一、誰れにも解り易き言句を用ひねばならない。二、言句と言句との聯絡は理路整然として筋目が通つてゐねばならない。即ち一は、文法的要件で

あつて、二は論理的の要件である。而して論理の注意は次章に於て之を述べることとして、こゝには主として文法的修辭の大要を述べて見たいと思ふ。既に前にも一言したるが如く、文章は一讀して直ちに文意が理解し得らるゝやうに作るべきものであるが如く、演説も亦之を聽いてゐる間に誰れにも判るやうに述べねばならぬものである。言を換へれば最も平易なる言句に依つて思想を明瞭に寫すことである。而して之を爲さんとするには先づ左の數點に注意することが必要であらうと思ふ。(イ)國語を使用すること、(ロ)言句の精確を期すること、(ハ)判り易き言句を用ゆること、(ニ)純粹適確の言葉を用ゆること、(ホ)言句は凡て聽きよく、面白くすること、(ヘ)言句には相當修飾を行ふこと等である。尤も此の外に於て、尙ほ注意すべき點は多くある。然し普通演説をなす場合は大抵如上の點を良く注意すれば甚しき過ちはなからうと思ふ。そこで是から其の大要を説明することにする。

(イ) 國語を使用すること、この點は前に言語の説明に於て、既に度々述べた積りであるが、我國に於てなす演説は云ふまでもなく我國人に聽かしむるためである。而して聽かしめると同時に理解せしめねばならない。否寧ろ聽衆は聽かんがために聽くにあらずして、理解

せんがために之を聽かんとするのである。然るに我國の演説家は往々にして、ことさら難解の字句を用ひて、己れの學殖を衒はんとする傾向がある。従つて解りきつたる事柄をわざわざ難かしい言語を用ひて之を解り悪くするのである。それでなくとも我が國語の中には可なり多くの漢語が含まれてゐて、之を言語として用ゆる際に當つて随分誤解を免かれぬものである。故に在來の邦語にして思想の表現に差支ない言語のある場合は成るべく漢語は之を用ひぬやうに注意せねばならない。前に示したる例の如く、今、家庭に於て下女や下僕に向つて、「おまへ達は外見し得らるゝ場所に於て、祖祕してゐると警察にて處罰さるゝ」と言うても恐らく何を云ふのか解るまいと思ふ。田舎出の女中などは早速「たんせき」の藥を買ひに行くかも知れない。それよりは誰れにでも判るやうに「はだをぬいてゐると警察に叱られる」と言へば直ぐに判るのである。昔、支那に白樂天と云ふ有名なる詩人のあつたことは諸君も亦承知であらうと思ふ。此の人が詩を作るに當つては、其の出來た詩を人に見せる前に、必ず先づそれを家に雇うてゐる無學な老婢に示して、若し老婢にしてそれが了解し得られねば、幾たびも訂正して老婢が一讀して直ちに其の意味が判るやうになつたとき、初めて

之を公にしたさうである。そこで白樂天の詩が少しく漢字を知るものなれば誰にもその意味が判る所以であらうと思ふ。而も白樂天が大詩人としての聲譽は今尙人口に膾炙されてゐるのである。文飾を唯一の誇りとする支那にも亦斯くの如き人があつたのである。既に言ふ如く我國に於てなす演説は、我國人が相手である。而して多くの場合に於て聴衆の多數を占むるものは、先づ其の程度が小學校卒業位のものと思ふ。今、斯かる人に向つて徒らに難かしい漢語や英語を用ゆることは寔に勞あつて益なきことであらうと信ずる。例へば「我見たる東京」と云つて事の足る場合に「我が腫子裡に映じたる東京」などと云ふのは演説の言句として最も注意せねばならぬことである。即ち演説の言句は飽くまでも通俗なる邦語に依つて、思想の表現をなすやうに練習せねばならない。要は如何なる無學のものにも、良く其の意義が判るやうに、最も平易に、最も通俗に之を陳べることが何より大切のことである。串戯にも英語まじりの演説などは斷じて慎まねばならぬことである。

(口) 言句の精確を期すること、是れ亦演説をなすもの、注意せねばならぬことである。即ち言句が精確でなければ、決して聴衆に向つて、演説者の思想を精確に寫すことはできな

い、そこで精確とは曖昧なる言句を用ひぬことであり、紛らはしき言句を使用せぬことである。例へば漫然と「傳染病が流行して来た。」「傳染病で死んだ」といふやうでは、傳染病中のコレラが流行して来たのかチブスが流行して来たのか之を聞くものには更に判らない、即ち修辭學がよく引くところの例であるが「二三日さきの話」と云ふたとすると、此の「さき」といふことは二三日前のことか、それとも二三日後のことか、甚だ曖昧な言葉である。又「シンドイケムタノム」と云ふ電報を打つたとする、此の電報は「寢臺券頼む」とも取れるし、「死んだいけぬ、たのむ」とも取れる。斯くの如く極めて曖昧な、紛れやすい而も二通りにも三通りにも意義の通ずるやうな言句を使用することは演説修辭としては勿論、文章を作る場合等にも亦注意すべき點である。尤も昔から名句名文と稱せられてゐるもの、中にも修辭學上から嚴格に批判するときは可なり缺點があるさうである。例へば服部嵐雪といふ有名なる俳人のよんだ「蒲團きてねたる姿や東山」と云ふ名高い句がある。これは云ふまでもなく京都東山の句であるが、此の句の意義は、人のふとん着て眠つてゐる姿が東山に似てゐると云ふのか、それとも亦東山の形がふとん着てねてゐる姿に似てゐるといふのか、見ようによつては

どちらにも取れるやうである。即ち斯る紛はしき言句は演説をなす際にはよく注意せねばならぬ。要するに演説は文章と異なり文字に依つて思想の表現をなすべきものにあらすして、兎角語類の多い言語を使用して思想の表現をなすべきものであるから、出来る限り狭義の語を用ひねばならぬものである。即ち修辭學上ではこれを「殊語」と稱してゐる。即ち前述の如き單に傳染病というては如何なる種類の傳染病であるか、甚だ不明なるが故に、之をコレラ、チブス、或は天然痘と、明確に殊語を用ひるならば之を聞くもの、之を讀むものをして更に迷ふことなく其の意義を理解せしむることが出来る。これ演説の修辭としては第一に平易通俗でなければならず、第二に精確なる言語を使用せねばならぬ所以である。次は努めて

(ハ) 判り易き言句を用ひねばならぬことである。此の點は(イ)に於て述べたる、即ち誰れにも判るやうな國語を用ひねばならぬことと略ほ同様の意味であるが、同じく平易なる國語を用ゆるにしても成るべく之を複雑ならしめぬやうに注意することを云ふのである。即ち言句を簡單にして無益の言語を弄せざることである。今日では餘り使用せぬやうであるが、十數年以前には演説の言句にも、往々用ひられた言葉の例として簡單に「されど」と、言へ

ばそれで済むところを態々「夫れ然り、豈にそれ然らんや」などと逆に言うたものである。其他「有らざるべからず」なからざるにあらず」といふ工合に、寔に廻りくどい打消語や裏返し語を用ひた人もあつたやうであるが、斯かる言句を使用するときはすぐに解ることでもそれが爲めに却て判り悪くなるものである。尤も斯くの如き漢文調の句はちよつと演説に力を添へるやうの感もあるが、然し言句に勢ひをつけねばならぬ場合は又他にいくらも其のやり方があらうと思ふ。要は漫りに複雑なる言句を使用して、意味を不明瞭にするよりか、努めて簡單明瞭ならしむるやうに言句を用ゆることが演説には肝腎である。

(ニ) 純粹適確なる言語を用ゆること。純粹とは、まじり氣のない立派なる、そして上品なる言葉のことを云ふのである。即ち同じ意味の言葉でも、野卑な言葉、尾籠な言葉、人が顔を背けるやうな言語は之を避けるやうにせねばならない。例へば人を呼ぶ際には其の人相當の敬稱を用ゆることである。假りに敵黨のものを稱するにも、濱口の野郎、田中の野郎などといふ卑しい言葉は決して用ゆべきものではない。改めて閣下と呼ばぬまでも、田中さん濱口さんが、と呼ぶ方が寔に聽く人の感じもよく、且つ又穩當である。而して適確なる言葉と

いふのは其の表現せんとす思想にぴつたりと合ふ言葉を用ゆることである。例へば「酒を持つてこい」と云ふ場合と「正宗を持つてこい」「お銚子を持つてこい」といふ場合とは、同じく酒を持つてこいと云ふ意味ではあるが、各々其の用ゆべき場合に依つて、ぴつたりと其の思想を現はすことができるものである。若し此の呼吸を誤ると、それこそ洋服つけて高下駄と云ふ、不恰好な聴き悪くい言句となつて終うから餘程注意せねばならないものである。即ち飯は茶碗に盛るべきもの、汁は椀に入れて、始めて恰好が出来るものである。と同じやうに思想表現の言句も亦多くある類語のうちからよく其の場合に適合する言葉を用ゆるやうに心掛けねばならぬものである。

(ホ) 言語は之を聴きよく、面白くすると云ふことは、凡て演説には乾燥無味なる千言萬語よりも興味ある片言隻句の方が餘程聴衆を動かすものであるから、徒らに理論一點張りて之を陳べずに、時には諧謔、詩歌、等の類を雜へて演説を面白くすることが大切である。如何に宜い理窟を陳べても、若し言句に少しの興味がなければ、聴衆は辛抱して之を聴いてくれないものではない。それは恰も水薬に單舎を加味し、又は漢薬に甘草と稱する甘味などを調

劑して患者に吞ませるやうなもので、如何に良薬でも患者が吞まねば利くべきものではない。そこで誰れにも吞めるやうにするのが調劑の秘訣である。演説も亦これと同じことで、如何に名論卓説も之を聴いて呉れねばそれこそ案山子に説法するやうなことになる。故に演説は或る程度まで言句には興味を附けねばなるまいと思ふ。即ち演説は之を聴きよく、又面白くせねばならぬ所以である。然し演説は元より興味中心のものではなく、思想が中心となるべきものであるから、餘りに諧謔や、比喩のみで聴衆を喜ばせると云ふ、行り方も亦考へねばならぬ。要はよく其の場面と聴衆の程度に従つて、或は俳句、或は詩歌、或は面白き物語りなどを加へて一面には論旨の理解を助け、他面には又聴衆の倦怠を防がねばならぬものである。然らば如何なる場合に如何なることを述べると云ふことは、演説の種類と其の場合に臨んで千差萬別であらうと思ふが、須らく平素に於て之が研究と其の用意をなして置くことが肝要である。そこををはりに注意すべきことは、凡て演説に使用する言句は勿論、諧謔比喩の類でも成るべく上品なる資料を選むことにせねばならない。低劣下品にして聴衆が顔を背けるやうなものは断じて使用せざる方がよいと思ふ。即ち醜劣聴くに堪へざる、彼の



場當り演説なるものが、實に雄辯道の外道として排斥すべき事であらう思ふ。諸君に於ても亦演説を面白く聴きよくすると云ふこと、時聴衆を賑やかす場當りの演説とを混同せざるやう特に注意して貰ひたいのである。

(八) 次は言句の修飾であるが、凡そ人が言葉を利用して思想の表現をなす場合に、同じ言語を利用して、其の利用の如何に依つては甚しく好感を與ふる場合と、然らざる場合がある。而してそれは叙事に於ても、叙情の場合に於ても同じである。故に同じ言葉を用ひて思想の表現をなさんとするならば、之を聴くものに成るべく好き感じを與ふるやうにすることは先づ第一の必要であらうと思ふ。殊に演説の如く大衆の心理を捉らねばならぬ際には、特に一段の注意を要するものである。従つて演説に用ゆる言句はできるだけ之を磨き上げ、できるだけ修飾し精選して、言葉の姿を美化することが大切である。然しながらこゝに言句の修飾と稱するのは、彼の詩歌や、美文類の如く頻りに言句の趣致風韻を尊重したがる意味ではない。けれども亦或る程度までは、詩人の用ゆる言句の用法等に學ぶ點があらうと思ふ。何となれば人の言語なるものは先づ口から出でて耳に通じ、而して心に感するのであ

るから、なるべく耳ざはりの好い、心ざはりのよい言葉を用ゆることが自然聴衆の心理を捉へることにならうと思ふ。詩人は常に天地を美化すると云ふが、詩人は又よく言語を美化してくれるものである。詩人の用ゆる言語、必ずしも特殊の言語ではない。同じく普通一般に使用されてゐる言語である。只其の言ひ廻し方の如何に依つて天地を美化し、鬼神も泣かしむることができるのである。そこで文章學としての修辭には、言句の修飾、即ち言語美化の方法が重要視されてゐる所以である。さて修辭學に於ては其の言ひ現はさんとする思想を如何にすれば、之を美しく面白くすることができるかと云ふ點に對しては、種々なる方面から之が研究をされてゐる。例へば事物を寫す場合に、餘り露骨に云うて氣に障るやう場合は、之を稀薄にして臙化するのである。即ち「糞又は、くそ」と云ふことを「手水」といひ「不調法」と臙化するの類である。其の他に相應する景物を添へて、内容を豊になし、感じを深刻ならしめること、即ち「非常に危し」と云ふ場合を「危きこと累卵の如し」と云へば一層感じを強めるもので、又或は人の意表に出でて、一時驚異の感を與へ、然し述べて行く間には自然と意味が解つて、却つて感嘆する類の如き、例へばよく用ひる言句であるが、「急がば廻

はれ「まことに面白くない話である」と云ふが如き、若し之を普通の言葉で言ふならば「急ぐなら近道を行け」「まことに面白い話」と言ふのであるが、それでは言句が極めて平凡へいべんになつて更に人が驚かない、面白くもない。そこで前の如き奇警きけいの句を用ひて人の感じを面白くするのである。尙ほ此の外修辭學に於ては言句の修飾、言語の美化等に就て種々研究されてゐるのである。従つて演説えんせつに志すものは一と通り修辭學の研究も亦必要であらうと思ふ。殊に修辭學上に於ける「クライマックス」の應用は最も演説には必要であらう。クライマックスとは修辭學上にて之を漸層法ぜんそうほふと云ふのである。即ち同じやうな語法を重ねて行つて次第に意義を強めて行く方法である。彼の舊劇きゅうげきに於て詰問きつもんの場面などに「さあ／＼返答どうだ」と詰め寄る行り方で、若し演説の場合ならば「一國を征服するものは勇者である、世界を征服するものは勇者である、自ら克つものは更に勇者である。」等の如く言句を最高潮さいかくに達せしめることである。然し此の「クライマックス」は一つの演説中濫りに用ゆることは餘り感心しない。なるべく一段の終り、或は結論間際等に巧みに應用するときには著しく演説に力と熱とを添ふるものである。

斯くの如く演説に用ゆる言句には、文章修辭學に學ばねばならぬ點が多々あるのである。就中言句の修飾をなさんとする際には、ある程度まで、その法則に従ふのがよからうと思ふ。

## 二四、聽衆の研究と雄辯

▽聽衆を閉却するものに、眞の雄辯はない。

是れまでの雄辯研究には、案外聽衆の研究が閉却されてゐたやうだが、最近になつてから聽衆の研究も矢張り雄辯の一要件として之を重視するやうになつたことは元より當然のことであらうと思ふ。

改めて言ふまでもなく、雄辯は演説の最上最良なるものである。然し、其の演説は決して獨りで行れものでもなく、又爲すべきものでなからうと思ふ。即ち幾人かの聴き手があつて初めて其の人達に、自己の思想感情を表現すべきものである。これ同じく思想感情の表現ではあるが、文章とは甚だ其の趣きを異にする所以である。文章は之を書いてゐる間は、元より獨りで何を書かうと何を寫さうと、それを讀者の眼に移すまでは實に筆者單獨の仕事であ

らうが、演壇に立つてはさうは行かない、一句一言、それが悉く直接面前に控へてゐる聴衆を相手とせねばならぬもので、従つて、間接に文字を通して、眼から心に感ずる文章よりも餘程演説の方が其の感度に於て鋭敏である。またそれだけ、文章よりも演説の方が人の心を動かす上に於て、或は其の範圍は狭いか知れないが、より強く、より早く利き目のある譯である。だから急を要する政治問題などには常に演説が重要視されるのである。

けれども前述の如く、演説は之を聴かんとする聴衆を直接の相手とせねばならぬものである、従つて之をなしてゐる間でも、亦時々刻々に變化しつゝある聴衆の心裡に對しても宜く細心の注意を拂つてゐねばならぬものである。恰も書面に依つて遠方の人を相手に談判する場合よりも、直接面前に相手方を置いて談判をなす時の方が、其の運びの速い代りに、また其の顔色や、氣心等にも充分注意せねばならぬと同じやうのものである。斯くの如く演説は其の聴き手である聴衆を直接の相手にせねばならぬもので、而も亦矢張り其の人達に向つて個人の談判と同じやうに意思の決行を促すのが主たる目的であるから、先づ大體に亘つて一應聴衆の心裡を觀ねばなるまいと思ふ。即ち聴衆の心裡を洞察することである。もちろん

如何なる場合に於ても人を相手とするには、先づ須らく其の人の心を觀ると云ふとは最も大切なことであらうと思ふ。まして演説の如き、其の相手である聴衆の心を動かさねばならぬものに於ては、尙ほ更のことであらうと信ずる。

これ雄辯に聴衆の研究が必要なる所以である。然し聴衆の研究と云ふも主として聴衆の心の研究であることを忘れてはならぬ、即ち人を動かさんとするには先づ其の心を動かさねばならぬからである。けれども私は是から六づかしい心理學の講義を避けて、成るべく經驗上から得たことがらを最も平易に話して見たいと思ふ。そして演説に志すもの、ために聴衆に對する注意を促したのである。

▽聴衆の心を動かさんとするには、先づ聴衆の心裡を洞察することに努めねばならない。

若しも演説をなして、更に聴衆の心を動かすことが出来なければ、それは單なる言語の遊戯であつて、そんな演説なら初めから行らない方が餘程ましであらう。然し聴衆の心を動かすと云ふことは、さう簡單にやれるものではない、如何に心理學の素養があつても、たゞそ

れだけでは駄目である。矢張り多くの経験即ち演壇の場数を踏むことが先づ必要であらうと思ふ。だから多くの場数を踏んだものは、左程心理學の素養がなくとも壇上から一見して大概聴衆の種類から年齢、そして其の人達の心持まで見抜いて終ふものである。而して聴衆の心を知らないでは決して聴衆の心を捉へることが出来るものではない。故に苟も雄辯の道に志すものは、徒らに疊の水練を止めて、成るべく實際の経験を積んで貰ひたいのである。別けて壇上から聴衆の心裡を観ると云ふやうなことは、どうしても實際的経験の教への方がためになるやうである。

偕て、演説を聴きに来る程のものは、之を大別して、初めから賛成であるか、全然反対であるか、或はそれとも、一應聴いて見てから賛否何れにか決定しやうと、云ふ人達と見れば宜からうと思ふ。尤も此の區別は主として、政治上社會上經濟上の問題に關する演説の聴衆を想像したのであるが、彼の學術講演或は單なる挨拶の場合はもちろん例外である。そこではそれから述べんことも主として普通の演説に就ての注意である。先づ登壇したならば一と通り壇上から聴衆全體の氣勢を見て、若し反対者が多数であると察したならば、餘り

最初から其の攻撃方法を取らないで、論陣を他の方面に移して、でき得るならば、一つの群衆心を創造して一時聴衆の氣分を好轉せしめてから、徐ろに反対意見の誤謬を正して行くやうにするのが良いと思ふ。でないと、由來人の心理なるものは假りに誤つた思想でも、一旦先入主となつてゐると、兎角之を固執したいもので、中には全く一つの信仰化してゐるものさへある。彼の政黨員などには往々さうした人達があるものである。故に反對黨の演説ならば其の説の是非善惡に拘らず、斷じて耳を傾けないと云ふやうな人が随分あるのである。今さうした聴衆を相手とする場合に、若し最初から直ちに其の人達の攻撃を始め、そして最後までさうした演説で終始することは餘程の名士でない限りは決して心から聴衆は聴くものではない。そんな行き方は大抵彌次が飛び出すものである。そこで無難な行き方としては、後に述べんとする群衆心を先づ創造してから、漸次に彼等の反抗心を緩和して置き、そして次第に自己の主張を彼等に徹底せしめるのが良い。あまり演説に経験のない辯士などは往々にして此の間の呼吸を知らないで、全然聴衆の種類や其の心裡を無視して、只徒らに自己の主張のみを曰はんとするから、飛んでもない醜態を壇上で演ずることが随分ある。よく注意せ

ねばなるまいと思ふ。

以上は主として聴衆の種類を思想的方面から観ての注意であるが、こゝに聴衆を観ると云ふことは決して思想上の點のみではなく、他のあらゆる方面から聴衆を見ねばならない。即ち年齢、職業等の別は云ふまでもなく、男女の性別から、演説開催の時機と其の會場附近の地理的環境等が又尠からず聴衆の心理に影響を及ぼすものであるが故に、其の邊のにも亦細心の注意を拂つて聴衆洞察の資料にせねばならぬものである。今、都會の青年や學生を相手に多大の感興を湧かして、大成功をした演説だからと云うて、若し之を其まゝ移して、山間僻村の老人達に聴かしたところで、必ずや同じやうな感興を湧かすものではない。私がこれまで経験から見ても、甲の土地では非常に喝采された演説が、乙の土地では更に反響のなかつた場合もある。詰り時と處と、そして聴衆の心を観ることの油斷からさした原因である。故に演説が濟んでから後で色々有志達に聞いて成る程さうであつたかと思ふやうなこともあるが、既に六日のあやめで役には立たないものである。だから私は演説をなす際には、例へ同じ思想を述べねばならぬ場合でも、其の時、其の場所の異なるに従つて、先づできるだ

け其の土地の人情風習から名所古蹟、或は歴史上の人物等も問ひ質して、聴衆を観るの資料となし、且つそれ等に依つて、又演説の組立修辭等にも多少の訂正を行ふことにしてゐる。諺に「郷に入つては郷に従へ」、「人を觀て法を説け」と云ふやうなことは演説をなすものにも亦守らねばならぬ教へであらうと思ふ。詰り演説の相手は、前にも云ふ通り、常に人であつて、人を離れては演説もなければ雄辯もない。如何に自分だけが名論卓説であると信じてても之を聴いてくれる相手が感動しなければ名論でもなければ雄辯でもない。要は聴き手の心を辯士の心と同じ程度にまで動かさねばならぬものである。即ち人と人との結合、心と心の結合、これが雄辯の使命である。そこで雄辯家たらんとするには先づ壇上から一見して、聴衆を観破し得るの力がなければなるまいと思ふ。だから演説中でも常に聴衆の一舉一動を注視して、其の態度を見ても直ちに彼等の意中を觀透すだけの明が必要である。もちろん演説は徒らに聴衆に迎合すべきものではないが、倦せず聴かせることゝ、聴かして理解せしむることは最も大切な要件であるから、呉れなくも、聴衆の種類、聴衆の程度、地理的環境等には充分注意して無駄の演説をせざるやう希望するのである。

▽聴衆の耳目は、之を辯士の一身に集注せしめるやうにせねばならぬ。

聴衆の心を捉へて、自己の思つた程度までに之を動かすことが出来れば、それで初めて演説をなした甲斐があるのであるが、それにはどうしても、辯士と聴衆の心が常に離れないやうにしてゆかねばならない。そこで演説をしてゐる際には、できるだけ聴衆の耳目をして辯士の一身に集注せしめて置かねばならぬ。尤も初めの間は大抵聴衆の耳目は辯士の一身に集るものであるが、然し、之を長く保つて、益々緊張せしめて行くと否とは實に辯士其の人の技倆如何に依るもので、こゝに述べんとする注意は、折角集注して來た耳目を辯士以外の人達に依つて往々散亂されることがあるから、今、其の二三の點を擧げて注意したいと思ふ。其の一つは主催者に對する注意であり、他は辯士等に對する注意である。けだし演説に經驗を持つてゐる人ならば大概は氣づいてゐることだらうと思ふが、彼の演説最中に左程用事がある譯でないにも拘らず、主催側の人達が漫りに演壇に入したり、或は附近を徘徊すること、又遅れて來た辯士の氏名演題などを新たに張り附けること等である。斯かることは寔に詰まらぬことのやうであるが、然しそれがために辯士の迷惑は非常のものである。例へば

漸く緊張して來た聴衆の耳目が一時他にそれるのは當然のこと、従つてそれを又もとへ回復するには相當努力をせねばならぬ場合もある。元來人の心をして、長く一方面にのみ集注せしめて置くと云ふことは實は寔に至難なことであつて、殊に演説會の如き多數の人を相手とする際には尙ほ更のことである。もちろん誰れでも獨りで落ちついてゐるときなれば、心理の統一を保つことも左程至難でないかも知れない、けれども多數の人達と一つ所に集合してゐるやうの時に之をなさしむると云ふことは決して容易のことではない。何となれば、人の心理は少し長い間多數の人達と集合してゐるときは、如何に靜かにしてゐてもそれが獨りで靜かにしてゐるときと異つて、理性の働きは減退して、其の代り感情の方面が著しく高調して來るものである。まして演説會の如き、成るべく聴衆の感情を刺戟して之を高調せしめつゝある場所に集合してゐる人達の心理は一層其の感情も高調し、神經も亦従つて鋭敏になつて來るものである。だから演説會の聴衆などが些細の時から衝突を起し、或は總立ちになるやうのことが往々あるのである。故に主催者の任務は先づ場内の靜肅を保つことが第一で、そして聴衆の心を辯士の所論以外に散亂せしめぬやうに努めねばならぬものである。尤

も此の外に主催者が辯士紹介の任務を兼ねる場合もあるが、斯かる場合は尙ほ更主催者は常に壇の一隅に控へてゐて、辯士の演説中は断じて他のものを漫りに壇上へ出さぬやうに氣をつけて場内の動靜はよく之を監視して、萬一妨害や彌次などのあつた際は必ず其のもの、人相、座席の位置までも確めて置くやうにせねばならない。そして演説中の辯士に用事のある際でも必ず主催者の手を経て、之を辯士に通ずるやうにせねばならぬ。それが今まで多くの場合に於て如何にも亂脈になつてゐるを私は常に遺憾に思つてゐる。今、辯士が、將に言句を高調して、聴衆の心理に一大刺戟を與へんとする時などに、突如「結論にして、降壇を願ひます」或は「他の辯士來る、降壇して下さい」と云ふやうな紙片を出されては、折角緊張して來た場内の熱も勢も一時それがために冷めるのみならず、聴衆の耳目も無論辯士の一身から離れて終ふのは當然である。全く注意せねばならぬことであらうと思ふ。尤も斯うした場合の中には必ずしも獨り主催者の責任だけでないときもある。即ち辯士が登壇前に豫め主催者と約束した時間を忘れて、徒らに調子に乗つて他の辯士の時間までも喰つて終ふやうな無茶な辯士もあるからさうした時には已むを得ず降壇を促さねばならぬ場合もある。然し

うした場合でも、矢張り主催者は宜く其の演説の切れ目を見て、比較的妨害にならぬやうな時を狙つて注意せねばならぬものである。要するに主催者たるものは、凡て演説の開會から閉會に至るまでは、全責任を以て、場内の靜肅と統一を圖つて、苟も聴衆と辯士との視野を妨げることはないやうに最も注意せねばならないと思ふ。

以上は主として主催者に對する注意であるが、同じやうに辯士に對しても亦注意せねばならぬ點がある。それは同一の會場で多くの辯士と演説せねばならぬ際には、登壇してゐるもの、外は無論控室で待つてゐねばならぬものであるが、其の際若し演壇と控室の接近してゐる場合には、できるだけ謹慎して、談話の如きは之を筆談でやる位にせねばなるまいと思ふ。然るに之も亦今まで多く見る例では、現に今、同志が熱誠をこめて演説してゐるにも拘らず、直ぐ隣りの控室では高談笑聲、而も無遠慮に騒ぎ散らしてゐるやうなことが随分ある。甚しいのになると、近い聴衆の眼にはよく映るやうの控室で、酒やビールを飲みながら頻りに談笑してゐるやうな不謹慎の人達もある。斯かることは實に辯士道徳の上からせひとも止めて貰はねばならぬのみならず、壇上の辯士と附近の聴衆はどれ程迷惑するものであ

るか考へねばなるまいと思ふ。延いては辯士全體の權威も著しく下落するようになるから、此の點は特に注意して置きたいと思ふ。

▽聴衆に動かされず、聴衆を動かさねばならぬ。

數多い聴衆の中には無論反對の思想を有するものもあるには相違ない。然し、それを或る程度まで心を動かして、そして其の人達を味方に引き入れる位に感動せしむることが出来れば、それが即ち雄辯である。詰り思想的闘争を過程として、聴衆の心を征服するのである。故に苟も演説をなすものは常に此の大見識の下に立脚してゐねばなるまいと思ふ。然るに演説をなすものの中には往々此の大使命を忘れて、區々たる小事のために心を亂して却つて聴衆に捉はれるやうな人がある。最もよくある例は、僅か一人か二人の彌次にでも會ふと直ちに憤激して、大切な演説を中絶して彌次を相手に一問一答を始め、甚しきものになると喧嘩を始め出すやうのものもある。もちろん斯る人は餘まり演説に慣れない人に限るが、中には相當場數を踏んだ人と思ふやうのものにもあるのが遺憾である。尤も彌次に對しては、時には巧妙なる修辭に依つて彼等を擲擄してやるのが寧ろ聴衆の心理を緊張せしむる一つの方

便になる場合もある。けれども單に彌次其のものを目標としての抗争は斷じて慎まねばならぬことである。でないといふや辯士の輕重を聴衆から見透されるのみならず、若し斯かる小事に拘泥するの結果肝腎な論旨が亂れるやうになつては、それこそ彌次の術中に陥るもので、正に人を捉へんとするものが、却つて人に捉はれることになるから、決して區々たる彌次などのために心を動かしてはならぬものである。

前にも述べた通り、一旦演壇にたつた以上は、自己の述べんとする思想を述べをはるまでは、中途に如何なる事變が起らうと、斷じて一步も退かないといふ覺悟が大切である。即ち妄りに心を動かさぬと云ふとは、只單に彌次の場合のみではない、彼の立會の官吏から突然注意を受けた場合、或は暴漢の現はれた場合、その他急に電燈の消えた時、火災や地震の起つたとき等で、斯う數へて見ると可なり辯士の慌てさうな事故がある。然しそんなことで決して驚いたり慌てゝはならない。實は私なども是れまでに、随分さうした經驗もあるが、矢張り泰然自若、どしどし論旨を進めて行く方が、却つて聴衆を靜める上に成效して來たやうである。但近火の際には臨機の處置を採る必要もあらうが、然し何處までも冷靜に落ちつい



てゐねばならぬ。俗に此の邊のことを演壇度胸とでも稱するのであらうが、矢張り斯うしたことは凡て理窟で教へる譯にはゆかない。先づ多くの場数を踏むのが何よりの教訓であらうと信ずる。要は何時でも壇上で倒れるの覺悟さへついて居ればよいのである。即ち生命がけで壇上に立つて至誠と熱情があれば何事も怖れることはなく、又それ位でなければ到底人の心が動かせるものでもないと信ずるのである。

▽聴衆をして群衆心を創造せしむることは、雄辯に最も必要である。

聴衆の共鳴をより強く得んとするには、先づ群衆心を創造せしむるに限るものである。そこで群衆心の創造と云ふことは、成るべく全聴衆をして、共通的思想に依つて共通的感情を激發せしめ、それに依つて聴衆を心理的に結合せしめることを云ふのである。だが普通に行はれる演説會は、彼の青年團或は同業組合等の主催する特殊の演説會と異つて、其の聴衆も亦年齢職業等の點は勿論、思想、感情、智識等の上にも夫れ／＼相違してゐるものと見ねばならない。即ち演説を聴きに來る人達の心を、今、嚴密に調べたならば、家を出てから、會場に入るまでの間は無論其の職業の異なるに従つて、年齢の異なるに従つて、それ／＼思想

感情等も異つてゐるに相違なからうと思ふ。故にたゞ演説の聴き手としての集りではあらうが、未だ其の人達の間には何等共通すべき關係のないのは當然である。曰はゞ其の人達の心持は全く離れ／＼のまま、で演説を聴きに來たと云ふに過ぎなからうと思ふ。然し、さうした心持を何時までも持たしてゐては決して聴衆の心を辯士に引き附けることが出来るものではない。まして其の人達の心を動かすことなどは尙ほ更できるものではない。そこで初は例へそれ／＼異つた思想感情の持主であつても、既に聴衆として直接面前に集つてゐる以上は、兎も角演説を聴いて見やうと云ふ點に於ては全聴衆の考へが一致してゐるに相違ない。例へば漫然として百貨店に入るものが、初めは別に何を買ふと云ふ當てもなく入つた客でも、既に這入つた以上は其の人達に何か買はして歸へすやうにするのが詰り商人の巧者と云ふのであらうと、同じで、一たび自己の演説を聴かんとする考へを以て集つた人達を吾ものにする<sup>し</sup>と否とは實に演説者其の人の手腕にあるのである。それには先づ第一に何か全聴衆の共通すべき問題に依つて、歩一步と聴衆の心理を刺戟するの外なからうと思ふ。偕て共通の問題とは何か、それは其の時、其の場合に依つて異なるであらうが、今一例を以て示せば、甲と乙

とは、個人としては無論思想感情學識等では相違するだらうが、民族として、國民として、市民としての關係は必ずや共通すべき何物かがなければならぬものである。即ち斯くの如く人類共存の上より、國家存亡の上より見るならば如何なる人でも相互に密接の關係を有するものであることは別に論ずるまでもなからうと思ふ。其の他お互の間には幾多共通の問題、共通の懸案は常にあるものである。そこで演説をなす際には巧みに斯かる共通的問題に依つて聽衆の心理を刺戟するならば、例へそれが一時的にもせよ、必ず同一感情に基づく心の結成を造るものである。而して若し之が數次くり返へされるときは、今まで離れなくであつた個人の意識がだん／＼冷却して、吾知らず共通的感情、共通的興味が油然として湧き出づるものである。凡て聽衆を斯うした程度にまで至らしむることを稱して群衆心の創造と云ふので、既に群衆心の創造された後の聽衆は大抵辯士の言句に信用を置くもので、愈々之が高調の域に達するときは全く辯士と聽衆は一體となつて、辯士熱すれば聽衆も亦熱し、一指一掌の動きにも亦聽衆が自然に動く云ふまでの妙境に達して來るものである。故に雄辯の第一義は群衆心の創造にありとまで曰はれてある位である。

以上は聽衆に對する大體の注意であるが、尙ほ深く研究されんとするの士は、心理學、殊に群衆心理學等を參考として、成るべく實際の活場面を數多く踏んで貰ひたいのである。

— 完 —

#### ▼著者の家庭と抱負

清瀬博士の令夫人は、人も知る比那子女史(卅三歳)で、音楽と和歌にかけては一の天才である。令息一輔君は今年十歳、僕は鐵道大臣になると、今から汽車や電車の建設に忙しい。現に永田町小學の三年生である。嚴君は郷里に隱棲、茂柏山人と號し、かたばら詩書に耽つて居る。——博士は東京と大阪に辯護士事務所を設け、名の如く南船北馬である。政見はと一矢を立てると、——政界革新、民衆政治の確立——の十一字に盡きて居るとして語れる一ふしに曰く、「これまでの政黨は言はゞ政權獲得の株式會社と見てよい。目的の爲めには敢へて手段を選ばない。で、政治は殆んど國民生活の實際には觸れて居ない。例之、鹽、砂糖、酒、烟草、綿布、綿絲の様な日用必需品、即ち富者も貧者も同一に消費するものに對しては、極めて高い税金を掛けて居る。又、國有鐵道にしても、三等の汽車賃で増収を圖り、一等客の方は丸で缺損になつて居る。吾々は、國家百般の施設に對し、努めて民衆生活の安定を得させるやう、一身をささげ、奮闘せねばならぬ」と、ひたすら義憤の念を燃やして居た。

— 竹 雨 生

馬琴翁と著作權 (清瀬博士談)

▼馬琴翁の八犬傳や美少年録は、江戸の書肆丁字屋の蔵版であるが、京橋の蔦屋は、如上の二書を草双紙の合巻に綴りかへて發賣した。丁字屋いたく怒つて見たが如何んとも致方がない、せめて彼と競争して負かしてやらうと、こたびは翁に無斷で、右の二書を名もなき戯作者に文章をちぢめさせ、合巻の廉價本として賣出させたと馬琴翁雜記に見えてある。亂暴な話であるが、印刷術の廣く行はれる時代に、著作權法なかつたとせば、これ式のことばさらに湧いて來ることは當然であらう。

迷信とシンラン (同上)

▼我邦で迷信打破の先驅者は親鸞である。彼の教理には方位方角なく、吉日凶日なく、稻荷もなければ金神もない。殊に驚くべきは、彼は火葬を唱へ、且之を勵行せしめた。父母の身體も愛妻の身體も、一旦、生を終れば一肉塊に過ぎぬ。之を焼き棄て、ただ其の靈のみ弔へと教へた。當年の日本人に之を教へ、之を信ぜしめ、且つ之を實行せしめたのは實に偉い。昭和の今日、丙午の迷信が打破せられないとは、さてもなさない。

入會規定

- ▼體裁——四六版布製一冊紙數約七十頁、九ポイント組ルビ附。
  - ▼刊行期日——毎月三冊配本。
  - ▼申込方法——申込と同時に會費(何ヶ月分でも)御拂込になつた方を會員として名簿に登録します。
  - ▼會費——一ヶ月分(三冊)金六十錢。六ヶ月分(十八冊)金參圓四拾錢。一年分(卅六冊)金六圓五拾錢。可成三ヶ月以上御拂込願ひます。
  - ▼送本料——會費の外に送本料(一ヶ月三冊分金六錢)申受けます。
  - ▼拂込方法——振替貯金東京六八二八六番に御拂込を便宜とします。
- 本叢書** 1、毎冊の題目は現代人の知らねばならぬものばかり。2、執筆者は現代一流の専門家を網羅す。3、記述平明而かも最も精確なる知識が得らる。4、専門的知見の泉! 高等常識の糧! 5、手頃の携帶本。而かも毎冊之を書齋に備ふれば、比、大家庭圖書館が建設せられる。5、定價至廉無比。毎月たつた六拾錢で三冊の本が得られる。

昭和四年十一月七日印刷  
昭和四年十一月十日發行

現代生活叢書 (第五回配本の三)  
第十五輯 新時代の雄辯法(下)

著者 清 瀬 一 郎  
發行所 東京市神田區一ツ橋通町廿一番地 曾 根 松 太 郎  
同 東京市神田區一ツ橋通町廿一番地 梅 津 和 市  
東京市小石川區久堅町百八番地 印 刷 所 東京市小石川區久堅町百八番地 君 島 潔  
東京市小石川區久堅町百八番地 共同印刷株式會社  
東京市神田區一ツ橋

發行所 帝國教育會出版部

電話九段(33) 三四五番  
三六三番  
三六三八番  
振替東京 六八二八六番



終

